

# オブジェクション172

岡森 利幸

## 失策・誤算編

本編は、次の11項目からなる。事件・事故の発生順での配列を原則としているが、例外もある。

- ① アイヌを指して「あ、犬」
- ② 介護ビジネスの質とコスト
- ③ ビーレフェルトの陰謀
- ④ ベラルーシ独裁者は五輪メダルを欲しがらる
- ⑤ 小田急車内で若い女性に切りつける
- ⑥ 大学後輩だった男の顔に硫酸をかける
- ⑦ 伊藤詩織さん・事件と審判
- ⑧ 菅義偉首相・評判の悪さ
- ⑨ コロナウイルス空気感染とワクチン副作用
- ⑩ タリバン、強すぎ
- ⑪ アフガン・首都カブールで誤爆

・文中敬称略。

・文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが

含まれる。

・以下の【】内は、新聞記事・週刊誌の引用あるいは要約・意訳したもの。

### ① アイヌを指して「あ、犬」

【朝日新聞朝刊 2021/7/22 社会

日本テレビの朝の情報番組「スッキリ」の3月12日の放送でアイヌ差別発言があったことを、放送倫理・番組向上機構（BPO）が発表した。お笑い芸人が「この作品とかけまして動物を見つけた時ととく。その心は、「あ、犬」。】

そのお笑い芸人自身は、単なる言葉遊びのおもしろさのつもりで、芸を披露したわけだろう。しかし、それには、引つかかるところがあった。

アイヌを「あ、犬」ともじった。アイヌを「ア」と「イヌ」に分解しての言葉遊びだ。お笑い芸人は、それを発案したのは自分と思っていたようだが、そうではなかったかもしれない。過去に、何人もいたようだ。アイヌの人は「犬」と言われた過去を忘れなかった。そんな人たちがテレビ局にクレームを入れたと私

は推測する。

それを言い出した人は、最初は、その場を和ませる笑いが目的だったかもしれない。しかし、何回か、多数の人に「あ、犬」と言われて、からかわれれば、アイヌの人は不快になる。自分がアイヌであることを恨むことになる。悔し涙を流したかもしれない。私が想像するに、アイヌの子どもを取り囲んで「オメー、アイヌだろ、ワンワンと言ってみろ、ここ掘れワンワン」とからかうような悪ガキが、過去に何人もいたりして……。

そんな過去を、お笑い芸人も日テレの関係者も知らなかったとみえる。知らなかったでは済まされない事態なのだ。この言葉遊びには、アイヌを犬と結びつけてしまう危険があった。アイヌを「犬」と呼んだように聞こえてしまう。それを笑いにしてはいけないかった。からかいを増幅したようなものだ。

お笑い芸人には、ダジャレ以外に「他意」はなかったと私は理解したいが、テレビの影響力は大きい。全国視聴者の前で、アイヌをからかったことになるから、重大な差別問題となる。特定の民族の人たちを動物の一種に例えたら、大きな侮辱になる。お笑い芸人よりも、それを放送した日テレ側に責任が重い。ひよ

つとして、日テレの社長の首が飛ぶかもしれない。

ちなみに、辞書によると「アイヌ」はアイヌ語で人（ひと）の意味するという。古代言語研究者の朴炳植（ほくへいしょく）の著書によると、初めての人・優れた人の意味をもつそうだ。ネット上で、ある人は、極北に住む人々「アイヌイット」との関連に言及する。確かに「アイヌ」の文字が共通だ。彼の人々は「オレたちはエスキモー（生肉を食べる人の意）じゃない、アイヌイットだ！」と主張したから、一部の地域では、もうエスキモーと呼ばなくなっている。アイヌイットの人に対して、「犬、イット」などからかつてはいけない。

## ② 介護ビジネスの質とコスト

【読売新聞朝刊 2021/3/29 一面】

高齢者住宅で、（行政は）過剰介護の原因となる「囲い込み」への監視を強化する。（業者は）サービス付高齢者向け住宅で併設のケアマネ事務所やデイサービスなどを合わせる（高い料金を取ろうとする）。】

【毎日新聞朝刊 2021/4/6 社会】

介護施設職員による高齢者虐待の件数が、行政が確認

した分だけでも、毎年増え続けている。証拠を固められず（うやむやになるケースも多い）。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/15 一面

65歳以上の人が4月以降支払う介護保険料の全国平均が月額6014円になる。自治体によって3倍近い開きがある。】

【毎日新聞朝刊 2021/9/2へんしんナビ

深刻な介護ハラスメント、職員の被害が絶えない。セクハラや叱咤を受ける。】

【読売新聞朝刊 2021/8/23 人生案内

【介護職員が「あの世に行けば」】

80代の女性。主人は20年前に他界し、子どもは県外在住。私は閑節リウマチで「要支援2」です。ショックな出来事がありました。デイサービスの利用中に理学療法士が突然、ニヤリと笑って「あの世に行けば」と私に言ったのです。あまりのショックで頭が真っ白になりました。すぐに施設側に訴えましたが、何も対処しません。謝ってほしいと言っても、その理学療法士はニヤニヤするばかり。ひどい言葉とニヤリと笑う顔を思い出して眠れぬ日々が続き、恐怖でした。市役所へ相談に行き、「お気持ちちはよくわかりました」と言われて久しぶりに心が晴れ晴れとしました。しか

し、3か月も回答を待っているのにその後、連絡はありません。施設も市も責任感がないと思います。

デイサービスの仲間と別れたくなかったのですが、行くのはやめました。今も私の心の傷は癒やされません。どうしたらいいのでしょうか。（大分・N子）】

利潤を追及しなければならぬ企業や団体は、高齢者たちの介護レベルを調整したり過剰介護をしたりして点数を稼ぐことには熱心だ。それらに雇われる介護職員についても、質が落ちていくという。手を抜いたりする。彼らは介護するどころか、弱者を虐待するケースも増えている。

そして65歳以上の人が支払う介護保険料は年々高くなりつつある。つまり高い金を払って、低下したサービスを受ける。自治体によって保険料に差があるのも問題だろう。

介護をビジネスとする人々が、厄介な「客」に対し、いら立ちを抑えられなくなるケースが多くなるのはあり得ることだろう。彼らが上から目線で、わがままを言ったり、指示に従わなかったりするから、つい怒鳴ったり、叩いたりしてしまう。現実を目の前にして、人間の尊厳などという立前たてまえは忘れてしまうのかもしれない

ない。すると虐待したと言われてしまい、通報されることにある。ただし、管理指導する側にしては、少々のは見て見ぬふりをしなければ、職員のなり手がなくなってしまうから、組織的な隠ぺいをする必要があるだろう。公になる虐待件数は氷山の一角だろう。

介護職は、苦勞の多い職業だろう。その割に低賃金だと言われている。利益を第一にするような経営者の下で働くから、労働環境が改善されない。「この利用者は、いやな人だ、怒鳴るし、セクハラもする」などと訴えることができなかったり、訴えても聞き流されたりする。「辛抱しなさい！ 黙って働け！」という圧力がかけられたりする。雇われ施設長から、休暇も自由に与えられず、深夜に働かされたりする。だから、ささやかな楽しみがないと、やっつけられないところがあるのかもしれない。

介護を受ける側にしても、介護施設やデイサービスでは、もう家族のように親身になって介護してもらおうことは期待できない（鬼嫁に介護してもらおうよりは、ましかもしれない）。職員からはマニュアル通りのことしかやってもらえないだろう。かゆいところに手が届かないから、いら立ちを募らせ、職員に、ついきつ

いことを言ったりするのだろう。気難しい性格なら、なおさらだ。そんな不平不満を施設側に訴えても、日常茶飯事（？）として扱われる。施設側は、よほど深刻なケースでないと、対応しないものだろう。

読売新聞・人生案内の記事で、N子さんは、介護職員（デイサービスの理学療法士）がニヤリと笑って「あの世に行けば」と言われたことで、憤懣ふんまんやるかたなく、気持ちが治まらないことを訴えている。私なりに興味を持った内容であり、要約せずに全文を引用した。ただし、識者による回答欄は省略した。

これは冗談なのだ。冗談でも、悪質な部類に入ることとは間違いない。言葉による『弱者いじめ』になっている。しかし、介護職員にとっては軽い冗談のつもりであり、暴言には当たらないと思っているのだろう。つまり、この介護職員は、高齢のN子さんをからかっている。ニヤリと笑ったのは、（これから冗談を言いますよ）という前置きなのだ。

十分長生きした人でも、今は死にたくはない。絵本作家・エッセイストの佐野洋子さん（1938～2010）が語っていたように、だれでも「いつ死んでもいいの、でも今でなくていい」と思っている。

この介護職員もそれを知っており、高齢者が嫌がる

ことをわざと言っている。その反応がおもしろかったのかもしれない。多くは「何てこと、言うの！」というように、いきりたつ反応を示すものだろう。それを見るのが楽しくて、他の高齢者にも「あの世に行けば」を言いまくっている可能性がある。あちこちから苦情が寄せられ、上司また指導員に注意されるまで、やめられなかったりして……。この介護職員の言動を深読みすると、高齢者に生きる気力を奮立たせるための「毒舌」だったかもしれない。

それに対し、利用者が言い返す言葉として、「私が死ねば、あなたの仕事が減るから、楽でしょうけど、収入も減るわよ」などと、まぜつかえしたい。

### ③ ビーレフェルトの陰謀

【毎日新聞夕刊 2021/7/29 総合・世界時空旅行  
ドイツ「ビーレフェルトの陰謀」篠田航一

「あなたはドイツのビーレフェルト市に行ったことがありますか」もし、いいえと答えると、「そのはずです。そんな町は実在していませんから」と言われる。はいと答えると、「あなたはだまされています。それ

は偽物で、本当は存在しない」と論される。これは1990年代にドイツで流行した都市伝説だという。ドイツで多くの人が知っている話だ。

しかし、ドイツ西部にビーレフェルト市が実在するのだから、少々話がややこしい。「そんな町はない」と言ってしまうことがウソになっている。ビーレフェルトの市民にとって、中には不快感が生じるような都市伝説だ。この伝説の出所はキール在住のエンジニア、アヒム・ヘルト氏だ。「1994年5月のこと。当時大学生だった私は、あるパーティでビーレフェルト出身の学生と知り合った。そこで私は『そんな町、ないでしょう?』とからかった。単なるジョークです。とにかく存在感が薄い都市ですから。これをインターネッ트에投稿したところ予想外に広まった」】

この記事は、ベルリン特派員だった篠田航一氏によるもので、よく取材して書いている。

ビーレフェルト市がほんとうに架空の都市ならば、これは少々意地悪な質問だ。聞かれた者が、行ったことのあるようなふりをして答えると、恥をかいてしまうだろう。油断のならない質問だ。回答者がウソをついたなら、すぐばれてしまう。

そもそも、実在していないことを知っているのに、相手に「行ったことがあるか？」などと聞く方がヤブなことだろう。

質問者は、〈相手ビーレフェルト市に行ったことがあるかどうか〉に関しての興味はない。ウソをつかどうか、あるいは、ごまかそうとするか否か、に興味がある。相手のあいまいな知識を試すのが目的になっている。

〈ドイツの町や村なら、ほとんどの所に行っている、名前だけならすべて知っている〉と自負しているような人に、この質問をぶつける。そんな自慢する人は「行ったことがない」とは言いにくいから、「多分行っているよ、街並みがきれいな古風な街だったかもしれない」などと答えるかもしれない。しかし、そんなドイツ通の、知ったぶりの鼻は、すぐにへし折られてしまう。

「そんな町は実在していない」と言い放つのは、気分がいいことかもしれない。街並みがきれいな古風な街だなんて、ウソだとして嘲笑<sup>あざわら</sup>ってしまえばいい。

もしも、ビーレフェルト市に行ったことがあるかと質問されたら、「行ったことはないが、話で聞いているよ、古風で街並みがきれいなところだろ？」素朴な

人ばかりで、変な質問をするような人は住んでいないらしいね」と答えて、にやりと笑いたい。

ハイカイイエカで答えるならば、正しくはビーレフェルト市が実在するのだから、ハイでもイエでも、どちらを答えてもいいわけだ。ハイに対して「あなたはだまされています。それは偽物で、本当は存在しない」、イエに対して「そのはずです。そんな町は実在していませんから」などと言ったら、「ビーレフェルト市が実在しないという都市伝説を信じる人は、今時、少ないよ。だまされているのはあなたです」と言っただけでいい。

#### ④ ベラルーシ独裁者は五輪メダルを欲しがる

【毎日新聞夕刊 2021/5/24 総合】

ベラルーシ、ギリシャ発リトアニア行き民間旅客機をベラルーシ空軍の戦闘機の誘導で緊急着陸させる。反体制派の人物を拘束。「機内に爆発物がある」との情報を受けたという。着陸はルカシエンコ氏自らが指示していたという。】

【モスクワ共同】

ベラルーシのルカシエンコ大統領は7月29日、東京五輪に出場する代表選手が一つもメダルを獲得していないことに不満を示した。選手らに「ハングリー精神が欠けている」ことなどを問題視した。タス通信が伝えた。大学関係者が集まる会議での発言では、

「他のどの国よりもスポーツに出資しているのにこの結果は何だ？」などとまくし立て、アフリカ出身の選手を例に挙げて「彼らは勝てば全てが手に入り、負ければパンクを探し回らなければならないことを知っている」と結果を出せない自国の選手やコーチを批判した。」

【毎日新聞朝刊 2021/8/3 国際

出場種目を勝手に変えられ、拒否したベラルーシ選手が帰国命令にも拒否して保護を求めた。出場種目の変更はルカシエンコ大統領の圧力によるとみられる。】

【毎日新聞朝刊 2021/8/4 総合

ベラルーシ選手亡命、ツイマノウスカヤ選手は東京五輪で、自身経験のない陸上1600リレーへの出場をコーチらに一方的に決められたとSNSで批判した。その後帰国を強要されたと訴えた。ロイター通信によると、ベラルーシ当局が、ツイマノウスカヤ選手の母に「娘は西側のスパイだ」と伝えた上で、帰国を勧め

るよう要求したという。】

【毎日新聞朝刊 2021/8/5 余録

ツイマノウスカヤさん亡命、チームのコーチ批判で帰国を命じられた同選手は、そのまま帰れば投獄されると、空港で警察に保護を求めた。

ルカシエンコ大統領はスポーツ界にも君臨する。同選手も過去の政権批判でにらまれていた可能性があるという。同国選手団はメダル2個と不振で（8/5時点で）これに激怒する大統領の発言も伝えられていた。】

【読売新聞朝刊 2021/8/7 社会

IOCはベラルーシのツイマノウスカヤ選手を帰国させようとした同国のコーチ2人のコーチ資格認定証を剥奪した。】

【毎日新聞朝刊 2021/8/8 社説

ルカシエンコ氏「我が国は世界のどの国よりスポーツに資金を投じているのに、メダルが取れていない」と選手やコーチを非難した。IOCは選手に帰国を命じたコーチの大会参加の資格を剥奪した。ルカシエンコ氏には選手らを弾圧したとして、すでに五輪関係の活動を排除している。】

【毎日新聞朝刊 2021/8/9 国際

強権政治のベラルーシ、弾圧が止まらない。抗議活動

参加の国立大学助手マリアさんは突然の拘束。かつてない規模の抗議活動を行った国民に現政権が恐怖を感じたとする。」

【毎日新聞朝刊 2021/8/29 国際

亡命ベラルーシ選手の過去の国際大会の銀メダルが2万1000ドルで落札された。得られた資金はベラルーシのアスリートへの支援に充てるといふ。】

ベラルーシの独裁者といえば、ルカシエンコ氏だ。

大統領としての絶対的な権力を振り回し、2020年8月には大統領選の選挙結果までも、強引に捻じ曲げて（自分の配下の者を選挙管理委員長に任命したりした）政権を離さなかった人だ。自分の都合のいいように権力を強化してきて、盤石なピラミッド構造の頂点に立つ。文句を言う者がいれば、権力で叩き潰してきてた。

今春、ベラルーシ領の上空を飛ぶ他国の旅客機内に、反体制派の「逃亡した記者」が乗っていることを聞き連けると、戦闘機を飛ばして、自国内の空港に強制着陸させ、彼を拘束した。その後、テレビに出演させ、涙ながらに反省の弁（彼の本意ではないことは明らか）を言わせる演出までした。その強引さ、国際法規を無

視したやり方に、世界が驚き、国際的な非難の声が上がったことは、記憶に新しい。

五輪メダルを欲しがるのは、独裁者の共通する願望のひとつだろう。オリンピックは、国別対抗戦だから、自国が多くのメダルが取れば、その独裁者として嬉しいことだ。

例えば、ロシアのプーチンも、選手たちに組織的なドーピングをやらせ、今回の東京五輪でも、その処罰としてロシアの国としての出場が認められなかった。ロシアの選手たちは、個人資格として参加しているわけだ。すべては、ロシアの独裁者・プーチンの責任だろう。権力者の指示なくしては、こんな組織的ドーピングが行われるはずがない。

今回、ルカシエンコは、選手やコーチたちにメダルをたくさん取るように厳命したわけだろう。ベラルーシの選手たちがメダルをたくさん取れば、最高指導者としての鼻が高くなる。他国に対して自慢できる。国の威信をかけて、選手団を送り出したわけだ、スポーツに国家予算を大目につき込んでいるのは彼自身認めていることだ。

確かに、時々私が競技を中継するテレビを見ている

と、ベラルーシ選手の姿が多い印象だった。人口約1000万の東欧の小国ながら、選手が多く出場し、それぞれががんばっていた。

五輪開催中に、女子1600メートルリレー（400×4）競走に、欠員が出た。ワクチン接種を受けていなかったためだとされる。それは単純なミスであり、選手というより管理者側の不手際だろう。それは役員やコーチたちにもわかっていた。「もし出場を取りやめれば、われわれが大統領に何を言われるかわからない……」大統領にどやされるに決まっていた。それだけでなく解任されてしまう恐れがある。そのため、急遽、代役として短距離走の選手のツイマノウスカヤさんに白羽の矢を立てた。

ツイマノウスカヤさんは、突然のことにコーチに反発した。短距離の選手が、ろくな練習もせず、中距離の400メートルを走るには無理があるから、彼女は渋った。不服を示した。しかし、コーチたちは引き下がらない。コーチたちは、恫喝に近い、強圧的な言い方もした。トップレベルからの、つまり大統領の指示であることを匂わせたとされる。母国にいる母親にも「娘にリレーに出場するように説得しろ」と強要したことがわかっている。

それでも、彼女は承諾しなかった。コーチの指示に従おうとしなかった。なんとしてでも出場しろ、というコーチに反発し、SNSでその不満をつぶやいたところ、ときには下手に出ている（脅したりすかしたりしていた）コーチ陣が、それを知って怒り狂った。SNSで実情がばらされたのだ。

「オレたちを批判するのは、いい度胸だ！ 選手ごときがコーチを大っぴらに批判するのは、とんでないアマだ。ネットで恥をさらしやがって……。ベラルーシの裏切り者め！ 反抗的な女め！ 見せしめにしたろうか」（日本のスポーツ界でも、選手がコーチや監督を批判するのは、ほとんどご法度だ）

そのことが本国にも伝えられ、大統領の耳にも入ったはずだ。

「それなら出場しなくていい。すぐに帰国させろ！」などという天の声が響いたことだろう。

即座の帰国が決まった。国営ニュースにも、取り上げられた。彼女を非国民扱いして、反逆的行動をなじる言説を展開した。つまり、大統領の逆鱗に触れた形になった。帰国したら、拷問され、西側のスパイの汚名を着せられ、自供を強いられる可能性が高まった。母親からも悲痛な連絡があった。

「おまえ、犯罪者扱いされているよ、国辱ものだだよ」

コーチたちに付き添われて羽田空港に行き、帰国の航空機に搭乗する間際に、コーチたちが離れた隙をつき、彼女が係員に亡命を求めたのは、やむをえない最善の選択だった。

その前に、コーチたちに言われるがままに、1600メートルリレーに出場すれば、また別の道を歩んだことだろう。そこでいい走りをしてメダルでも取ったりしたら、などと私は空想してしまう。彼女も「中距離は走れないという自己主張をしたばかりに……」という後悔が脳裏をかすめたかもしれない。結局、国際的な理解が得られて亡命に成功したが、ベラルーシでは逃亡者として汚名を一生着せられるのだろう。

後日、彼女は亡命先で、過去の国際大会で得た銀メダルをネットオークションで売り飛ばした。メダルを欲しがる大統領への当てつけだろう。

「さあ、メダルが欲しいのなら、お金で買えるわよ！」

## ⑤ 小田急車内で若い女性に切りつける

【毎日新聞夕刊 2021/8/7 社会】

小田急刺傷事件で、36歳男を逮捕、殺人未遂容疑。8月6日午後8時ごろ、10人に重軽傷(逃げる際に転倒してけがをした人を含む)を負わせた。

その前、6日の昼ごろ、新宿区内で食料品の万引きをしたとして通報された。「(通報した)女性店員を殺してやりたいという感情が芽生えたが、すでに店が閉まっている時間だったので電車で切り替えた」

【毎日新聞朝刊 2021/8/9 社会】

小田急刺傷、対馬悠介(36)(自宅のアパートに近い)よみうりランド駅から乗車、登戸駅で新宿行き快速に乗り換えた。「大学時代から女性に見下され、勝ち組の女性を殺したいと考えるようになった」

【読売新聞朝刊 2021/8/10 社会】

小田急切りつけ容疑者は数カ月前から生活保護を受けていた。当日、6日昼過ぎに新宿区の輸入食料品店でベーコンやつまみを万引きしたとして通報された。この直前にもコンビニ店で酒を盗んだといい、万引きの理由について「余計な金を使いたくなかった」と供述。

【毎日新聞朝刊 2021/8/10 社会

小田急刺傷、「女性とうまくいかなかった。勝ち組の女性を殺したいと考えるようになった」

8号車でサラダ油をまいてライターで火をつけようとしたが失敗。

「自転車を盗んで逃げたが、疲れた」（彼はしばらく夜道を走ってから、コンビニ店に入って自首した）

「誰でもよかったが、人を殺せなくて悔しい。でも、逃げ惑う姿を見て満足している」

「（牛刀は）2年前に自殺しようとして購入した。だが自殺は痛そうだからやめた」】

【毎日新聞朝刊 2021/8/14 社会

小田急線刺傷、発生から1週間。容疑者、温厚な人柄が一変か。

（高校・大学の級友たち）「温厚な人柄で、常に笑顔で優しかった」「気遣いのできる先輩だった」「（女性関係で）トラブルは聞いたことがない。彼女もいたと聞いている」

捜査本部の調べに饒舌に動機などを語る一方、被害者への謝罪や反省を示さない。容疑者「大学時代にサークル活動で女性から見下された」

大学に5年間で在籍して中退。中退後は職を転々とした。

「6年前から幸せな女性を見ると殺してやりたいと思うようになった」

同じころ、家庭の事情で実家を離れ、1人暮らしを始めた。昨年6月に人材派遣会社に登録し、コンビニ店やパン工場で働いていたが生活は苦しく、事件の数カ月前からは生活保護を受給していた。

「くそみたいな人生になったのは周りのせい」

確井真史教授「元々優秀だった人ほど人生でつまずいた責任を他者や社会に転嫁してしまうことはある。」

（以下略）】

【週刊文春 2021/8/26 日号 小田急刺傷

中学・高校での成績は上位だった。偏差値六十前後の中央大理工学部土木工学科に現役入学した。

（大学時代の知人）「テニスサークルに所属し、一人で寂しそうにしている一年生にやさしく話しかけるいい先輩でした」

だが、対馬は「大学のサークルで女性から見下され、その頃から勝ち組の女を殺したいと思うようになった」と供述している。

5年間で在籍して中退した後は、（高校時代の同級生）

「定職に就かず、コンビニでバイトしていると言っていました。ふざけた感じで『今はナンパばかりしてい

て、ナンパ師だよ』成功率は数%と言っていました」  
両親は離婚していた。だが、六年前(捜査関係者)「母親が再婚したのです。それで対馬は家を出され、一人暮らしせざるを得なくなりました」  
対馬「短期のバイトで女に顎で使われ、女に恨みを持つていた」

母親は事情聴取で「なぜ息子が女性を蔑視する考えを持つようになったのか見当もつかない」

八月六日、対馬はいらだっていた。一度も失敗したことがなかった万引きが、新宿の食料品店でベーコンとオリーブを盗んだ際に初めて発覚した。「通報した女性店員もろとも、店員を全員殺してやる」

【毎日新聞朝刊 2021/8/27 社会】

小田急刺傷で男を再逮捕へ。女性(50代)に対する殺人未遂容疑。重傷を負った大学生の女性(20)の向かいの席に座っていた。後ろから牛刀(刃渡り約20センチ)で両脇腹に切りつけ殺害しようとした疑いがある。この女性は全治2週間のけがをした。

(対馬)「大学時代に女性から見下され、出会い系サイトで知り合った女性ともうまくいかず、勝ち組の女性を殺したいと考えるようになった」と供述。】

【読売新聞朝刊 2021/8/28 社会】

小田急切りつけの対馬容疑者を再逮捕。対馬「たくさん人を殺そうとした」

車内の防犯カメラには対馬が最初に女子大生を襲った後、向かいの座席から逃げ出した女性を追いかけ、背後から切りつける様子が映っていた。さらに包丁を振り回し、別の乗客の男女2人にも切りつけたが、包丁が座席脇の金属製ポールに当たり、柄が外れたという。包丁を放置して8号車に移動し、サラダ油を床にまいて火をつけようとした。】

対馬悠介は、30代の若さで生活保護の受給者だったという。この男がなぜ生活保護を受給できたのかに、私は素朴な疑問を持つ。単に、生活できる収入がなかったためだろうか。

それだけで推測されるのは、まともな仕事に就けず、頼るべき親族も知人もいなく、生活に困窮していたことだ。生活が破綻し、社会人として自立できない人物像が浮かび上がる。金がないのに、酒浸りの生活だったこともうかがえる。

記事によると、警察で取り調べを受けたときなど、彼はよくしゃべっているのも特徴的だ。包み隠さず、ペラペラしゃべっている様子うかがえる。なかなか

口を割らない容疑者が多い中で、それでは取調官は楽でよかったです……。

この男の場合、自分の情動に突き動かされ、自制心が効いていない。行き当たりばつたりの、計画性のなさが際立つ。衝動的なのだ。計画性がなければ、金を貸してくれるところもなくなる。結局、失敗だらけの人生になってしまっている。

事件後、逃走したけれど「自転車を盗んで逃げたが、疲れた」では、なさない。数キロの短い距離を走っただけで逃走をあきらめた。私としては不謹慎ながら、100キロぐらい走って、行方をくらませるぐらいの、凶悪犯らしいガッツを見せてほしかった。これでは、コソ泥程度の逃げ方だろう。

20代前半まで、それなりの高等教育を受けた。成績上位で、容姿にも恵まれた青年だった。温厚で明るい性格だったともいわれている。大学に5年いて、退学した。退学は、人生の一つのつまずき（失敗）になったことだろう。学費が払えなくなったりして、勉強に集中できなくなったようだ。退学した理由は本人が一番よく知っていることだろうが、彼の場合、それを他人のせいにしたりにしている。両親の離婚が影響した

のだろうか。

その間に、女性に関心を持ち、失恋を何度かしたようだ。キャンパスには、花のような女性たちにあふれている。彼が言葉巧みに近づいても、やがて女性たちは理由も告げず、去っていった。「なぜだ？」と彼は思ったことだろう。彼の不満が募る。

そんな女子大生には、男を見る目があっただけだろう。チャラチャラしておだてるのがうまいが、時には女性を見下す、まじめに勉強していない、将来性のまったくない、遊び人だと見抜いたのだろう。

女性を見下す男が女性にもてようとすることに無理がある。彼は「オレをふった女の方が悪い」とでも思ったのだろう。

退学後、就職しても、長続きしていない。派遣社員として働いていたようだが、専門的な職種でなく、低賃金だったのだろう。カネは欲しいけれど、底辺で働くことが苦痛になる……。派遣先で女性に顎で使われたことも、尊大な彼にとって屈辱的な経験だったのだろう。離職すれば、生活は困窮してくるから、やりきれない。一つのとつまずきから、立ち直れなくなってしまう。

30代になり、切実な生活苦になったのだろう。年

齢を重ねても自立できていない。付き合った女性がいなくても、すぐに離れていくから、もちろん結婚もできない。知人たちはみな社会人として堅実な人生を歩み始めているのに、自分だけが取り残される。

「くそみたいな人生になった」と彼は思う。2年前、牛刀を購入し、それで自殺しようとしたが、「痛そう」だから、失敗に終わっている。確かに、刺された側は、そうとうに痛い。

この状況を私がさらに憶測すると、経済的に困窮し、つい、カネを借りてしまい、その後の借金の取り立ての厳しさが身に染みたのかもしれない。酒を飲み、万引きを繰り返すような、皆さんだ生活をするようになった。アパートを追い出されたりしたことだろう。住む所がなければ、どうしたのだろう。

周囲がそれを見かねて、生活保護申請を勧めたのかもしれない。彼の申請がどんな条件でパスしたのか不明だが、ともあれ、受給する身となり、郊外のアパートに居住していたわけだ。

それでもカネが足りなかったのだろう。成功率の低いナンパをしたり、酒を飲んだりしては、金が足りなくなるのは当然だ。

そして8月6日の昼、輸入食料品店で万引きに失敗

した。状況を推測してみよう――

ドアを出ようとしたとき、女性に呼び止められた。このオンナ、オレを監視していたなあ。それまでうまくやっていたのに……と心の中で悪態をつく。酒とつまみを用意しようとしたが、うまくいかなかった。以前にも、タダ酒を飲んでいたのである。味を占めていたのだ。

女性に代わった店側の男に、ねちねちと追及された。万引き対応の専任者として彼は、おそろしく陰険で高圧的だったことだろう。万引犯をいたぶるために雇われているような人物だった。それが長時間に及び、その挙句、警察に通報された。おそらく、彼の態度が悪く、つい、彼は猛々（たげたげ）しくなった。こんどは警察官たちに夕方までみっちり絞られた。また長時間にわたって説教された後、パトカーに乗せられ、夕刻にアパートまで送り届けられたことが近隣住民に目撃された。へもう家に帰って頭を冷やし、反省しろ！という意味の警察官たちの親心だったようだ。彼は初犯として、大目に見てもらえたのかもしれない。

しかし、この男は、それを知ってか知らずか、通報した女性に逆恨みし、すぐに復讐を企てた。警察官たちには不遜な態度を見せなかったかもしれないが、心

の中では逆上していた。とっておきの牛刀（包丁の一種）を持ち出し、サラダ油とライターを用意した。それらは、万引きをとがめられた店に火をつけるためだった。

「あのアマ、オレがこんな目にあつたのは、あいつのせいだ。やつらのせいだ。寄つてたかつて、このオレを犯罪者扱いしやがつて」

彼は最寄り駅の読売ランド前駅から小田急の普通電車に乗った。しかし、この男は、登戸駅で快速に乗り換えたところで、あの店がもう閉店時間になっていたことを思い出した。（通報した女性店員など、帰宅しているころだろう）と思うと、その復讐をあきらめざるをえない。電車内を見回しているうちに、日ごろから恨みに思っていた『勝ち組の女子大学生』の姿を見つけた。彼にとって『勝ち組の女子大学生』なら、だれでもよかつたし、女性店員よりも格上の、最も憎むべきタイプの女性だつたから、ちようどよいと考えた。『勝ち組の女子大学生』とは、彼にとって、かつて身近にいて、あこがれの存在だつた。今では、彼のような男にはハナも引つ掛けない……。

男は殺傷力の強い牛刀で、若い女性に切りつけた。何度か切りつけたが、殺すことには失敗した。逃げ出

した別の女を追いかけて背中から切りつけた。結局、彼女にも逃げられた。殺せなかつたことについて、後日、彼は「彼女は、運がよかつただけだ。オレは殺そうと思つた」などと供述した。（裁判で、殺意があつたと認定されたら重罪になるから、それを軽々しく取調官に言つてはいけない）

そして、電車の床上にサラダ油をまき散らし、ライターで着火させようとした。これで彼は乗客たちを大量に焼き殺せると思つたのだろうが、ライターではサラダ油は燃えなかつた。

この着火の失敗は、乗客たちには幸いした。もしそれがサラダ油でなくガソリンだつたならば、瞬時に燃え盛り、2019年に起きた京都アニメーション放火事件の再現になつたはずだ。新宿行きの快速電車（10両編成、私も時々利用する）の車両内が紅蓮くれないの炎と真つ黒い煙で充満したことだろう。

## ⑥ 大学後輩だつた男の顔に硫酸をかける

【神奈川新聞朝刊 2021/8/31 社会】

硫酸事件、沖縄で逮捕された花森容疑者（25）が供述

「大学時、態度が悪かった」「大学時代にため口を使  
いトラブルになった」

被害の男性会社員（22）とは琉球大のサークルで一緒  
だった。花森容疑者は昨年度編入し、静岡大の学生。  
東京メトロ白銀高輪駅で、8月24日午後5時ごろ男  
性の勤務先をうろついていたことが防犯カメラに写っ  
ていた。（犯行は午後8時ごろ、男性の顔に硫酸をか  
け、重傷を負わせた）

【毎日新聞朝刊 2021/9/1 社会】

硫酸事件、花森容疑者は沖繩の大学に被害男性より1  
年早く入学したが、2年生になって入ったサークルで  
は男性と同期だった。昨年9月ごろ、容疑者からS  
Nのライン（LINE）で「泊りに行っていいか」と  
連絡を受けたが、被害の男性は琉球大学在学中で卒業  
論文の作成で忙しいことを理由に断ったが、執拗に求  
められたためラインをブロックしたという。その後、  
態度を改めることなどを求める脅迫めいた手紙が届い  
たという。

男性は今年7月に都内の路上で容疑者に突然声をかけ  
られ、繰り返し大学時代の態度などについて不満を言  
われた。その際、男性はラインをブロックしたことを  
謝罪したという。】

【週刊新潮 2021年9月9日号】

花森は、白銀高輪駅で知人男性（22）の顔に硫酸をか  
けた傷害容疑で指名手配され、逃亡から4日後に沖繩  
で逮捕された。花森は大学2年生の時、映画サークル  
に入会。この時、1学年下だった被害者から「おい、  
花森」などと呼ばれたことが発端とされる。

花森は高校時代に（海外に）留学し、浪人も経験して  
いるため、被害男性とサークルで同期だったという。  
高校時代に、整体院を営んでいた父親が亡くなり、大  
学3年の時に母親（医師だった）が早逝した。それを  
機に静岡に戻ってきたという。7月下旬、都内の六本  
木の路上で被害男性を呼び止め、「バカにしてただろ  
う」などと詰め寄った。】

花森は被害男性Aの顔に硫酸をかけた後、静岡の自  
宅に戻り、50万円を手にとって沖繩に逃亡した。計  
画を達成したけれど、追われる身となった。しかし、  
数日後、公園に一人でいるところを警察官に職務質問  
され、逮捕された。もう警察には「重要参考人」とし  
て特定されていたわけだ。（すぐにつかまってしまう  
のは、計画性に問題があった）

花森は沖繩の大学にAより1年早く入学したから、

Aの先輩に当たるとは、Aが2年の時に入ったサークルでは、花森と同期になっていたという事は、花森はこの時点で1年留年していたわけで、同期(同年生)だったから、ため口をたたいた(対等の口の利き方)としても、仲間意識の表れであり、決して悪くはないだろう。同年生なのに、先輩面をする方がおかしい。しかし、この「ため口」を、花森はいつまでたっても不満の根拠にしている。あまりにも、ささいなことだ。事件発生の当初においてAは、「トラブルの心当たりはない」と証言している。まさか、そのせいで硫酸をかけられるとは、思いもよらないことだろう。その後も、ときおり花森は先輩風をふかしてみたが、Aが軽く対応(ほとんど無視)した。そんな一連の態度が、花森をいらだたせ、事件に走らせるインセンティブになった、と考えられる。

Aは今年の3月に琉球大を卒業したことになるが、花森は昨年、卒業論文を書かずに、静岡大に編入したりして卒業を見送っている。卒業したAと、卒業できなかった花森とでは、ここで大学での立場は逆転した。花森はまだ学生なのに、Aは大学のOBで、社会人となっているから、花森にとって格上の人になっている。

社会では、年齢の上下にかかわらず、あるいは男女の性差も関係なく、地位やランクが逆転することはよくあることだ。例えば、同期と思っていた同僚が、いつの間にか、自分より上級職に就いていることがある。しかし、花森は、いつまでたっても兄貴分のつもりだったのだろう。単に年齢が上というだけのことで。

昨年9月のとき、Aが卒業論文を作成していたことを知っていたはずなのに、「泊めてくれ」としつこく頼み込むのはどういふつもりだったのか。自分の卒業論文はどうなっていたのか。

花森は、ここで、もうストーカーになっている。執念深く、つけまわしている。花森にとって、Aは「お気に入りの子分」のような存在だったのだろう。子分は「兄貴分」の自分を敬うべきだと思ひ込んでいたわけだ。一般に、男が女性に付きまとうストーカーが多い。その場合、男は「おまえはオレの女だ」と思ひ込んでいる。花森は「おまえはオレの子分だ」と思ひ込んでいる。

その子分が、いくら言っても、自分の思い通りに対応しないものだから、いら立ちを募らせ始めた。子分が自分に対し、ぜんぜん敬意を示さない。子分が兄貴分のラインをブロックするとは、とんでもない行為に

思えたことだろう、自分を迷惑者扱いしたことなのだ。実際に自分が迷惑になっていることに、花森は気がつかない。

今年7月にも、花森はAを待ち伏せし、路上でそのことを注意した。しかし、Aはその場を取り繕うような対応だけで、はぐらかすような態度……。

とうとう、8月24日夜、〈可愛さ余って憎さ100倍〉的な激怒になり、退勤する道筋で待ち伏せし、いきなりAの顔に硫酸の濃縮液をかけるという暴挙に出た。これが劇薬であることは百も承知だろう。Aとしては、へんなストーカーに付きまとわれてしまった悲劇だ。憎まれてしまったけれど、Aに落ち度はなかったはずだ。

花森は少年時代から優等生だった。琉球大学や静岡大学という高レベルの大学に入れるだけの学力を持っていたのに、親族や、それまで教育に係わった学校関係者は、この事件でがっかりだろう。しかし、花森に両親や兄弟はいない。

彼は経済的には恵まれた環境にあったようにみえる。しかし、高校の時に父親、そして大学の時に母親を失くしたことは、相当ショックだったようだ。一人っ子

で育てられた彼にとつて母親の存在は大きかった。母親の出身地・中国はともかく、医師の母親は、家庭でも指導的立場で、彼のために何でもしてあげていたとされる。高校の時に留学を勧めたのも、母だったのだろう。彼はおだてられて育ったところがある。つまり、過保護で、母離れしない青年になっていた。学校では一人でいることが多かったというから、友人関係も少なかったようだ。しかし、その頼るべき人を失った。家族のいない生活で、「苦境に立たされた」と表現している。勉強に身が入らなくなり、留年したりしている。沖縄での日常生活がおかしくなり、地元に近い静岡大学に編入したが、ここでも卒業の見込みがあつたかについては不明だ。

彼の場合、それなりのプライドと悲哀があつたと思われるが、恨みや不満の標的として、かつて後輩だった男性に目を付けた。やり場のない不満の矛先を男性に向けたのだろう。バカにされたことが、くやしく思い出された。それが筋違いであることは、言うまでもない。

もしも母親が、息子に「沖縄にいたとき、年下なのに、ボクを見下すヤツがいたんだ。どうすればいい？」と相談されたとなると、「見返してやりなさい

い！」と答えたかもしれない。しかし、「顔に硫酸をかけなさい！」とは言わなかったはずだ。母の期待を裏切り、破滅的な人生に踏み込んでしまった。

バカにされてくやしかったら、能力のあるところを見せつけたり、自分が社会的に偉くなったりして見返してやれ！

### ⑦ 伊藤詩織さん・事件と審判

【毎日新聞朝刊 2018/10/11 メディア時評】

伊藤詩織さんが、TBSワシントン市局長だった元記者にレイプされたと訴えてた件。元記者は安倍晋三首相と懇意で、事件後にも首相のヨイショ本を出している。彼の逮捕が執行直前に「上からの」指示で取りやめになった不可解さは週刊新潮がすでに報じた。】

【毎日新聞朝刊 2019/12/19 社会】

性被害・伊藤詩織さんが勝訴した。元TBS記者に賠償命令、330万円（請求1100万円）。山口氏は（伊藤さんが主催した）記者会見などで名誉を傷つけられたとして1億3000万円の賠償を求め、反訴していたが、地裁は名誉毀損には当たらないとして棄却

した。なお、伊藤さんはネットなどでバッシングを受けていた。】

【毎日新聞朝刊 2020/7/8 総合・社会】

伊藤詩織さんへの書き込み70万件の分析を担った荻上チキさん。

大量の書き込みを行った投稿者たちは「被害者にも何らかの問題があったはず」と解釈する傾向がある。彼らは攻撃的投稿（誹謗中傷）を拡散した。リツイートされることで、より攻撃的な言葉にエスカレートさせていく。】

【毎日新聞朝刊 2021/9/22 総合・社会】

伊藤詩織さんの性的暴行訴訟、1審では「性行為に合意がなかった」とし、山口氏に330万円の支払いを命じた。山口氏は、虚偽の被害公表で名誉を傷つけられたとして1億3000万円の損害賠償を求めたが、山口氏の請求は棄却した。

伊藤さん「（山口氏から）裁判の内外で正当な反論を超えた中傷を受けた」

山口さん「ありもしない被害を作り出され、私は社会的に殺された。うそをはっきり認めてほしい」】

【Yahoo! Japanニュース 2021/10/2】

北村滋・前国家安全保障局長（64）が官僚トップの内

閣官房副長官に浮上した理由。

内閣官房副長官とは実質的に官僚のトップである。これまでも彼は幾多の要職に抜擢されており、「霞ヶ関内では、安倍さんのお友達人事の結果と揶揄する声は大きかった」。国家安全保障局長になったときには、安倍前首相の推薦があった。過去において彼は「伊藤詩織さんの準強姦逮捕状を握り潰した男が警察庁長官に就任」と報じられた。」

この事件は、当夜、伊藤詩織さんは山口敬之氏に泥酔させられ、タクシーでホテルに乗り付けられ、連れ込まれた末に、性行為をされたことだ。準強姦罪\*1に当たるか、どうかが争われた。二人とも学識があり、能力を生かして国際的に活躍の場を広げていたから、泥沼の争いすることにふさわしくない人物だ。

この件で、山口敬之氏の激怒ぶりが際立っている。彼女に対する恫喝じみた批判（ほとんど罵倒）をするとともに、周囲に群がる記者に対して、にらみつけ「下手な記事を書くなよ、あらぬことを拡散させたりすると、法的手段に訴えてやるからな！」などと、いきまく。

誇張して表現するならば、「このアマー、世間にウ

ソを言いまくって、オレをおとしめたいんか！」などと吼えまくる。伊藤さんを嘘つき女呼ばわりする。その傲慢さ・強情さ・猛々しさはたいしたものだ、と私は感心する。必死に自分を守ろうとしているだけでなく、人聞きが悪いものだから被害者意識に凝り固まり、伊藤詩織さんを攻撃していることに注目したい。彼は準強姦の罪で書類送検されたのだから、不名誉の極みであり、いきり立つのは無理もないことかもしれない。彼にはそれが不起訴になったということが強みになっているのだろう。〈オレには、強力な後ろ盾がついているんだ！〉とも思っているのだろう。山口氏はその後悪びれることなく、自分の正当性を主張し、自分を一方的な加害者に仕立てた伊藤さんを非難し続ける。

彼は、元TBSの上級社員だった。時の首相とも親交があったとされ、社内でもそれなりの地位にあつて羽振りのよい男だった。それだけに醜聞は、彼だけでなく、企業のイメージに、また政権にも関係する汚点になりうる。

2015年4月、事件が起きて数日後、伊藤さんは被害届を出した。高輪署が受理し、その捜査部門が状況を把握してから、6月に彼に対する逮捕状をとった。

その逮捕請求が、いったん認可されながら、警察上層部からの指示でもみ消された経緯があった。準強姦の罪に問われ書類送検されたが、検察では嫌疑不十分で不起訴とした。準強姦では示談が成立したことで不起訴となるケースがあるのだが、このケースは示談ではない。そもそも嫌疑不十分だったら、逮捕状は認可されない。

この事件を握りつぶした人物として北村滋氏と中村格氏の名が週刊誌などに挙げられたが、彼らは上位からの指示に従い、職務を果たしただけの役人たちだった。もしも従わなければ、彼らの昇進の道は閉ざされることになっていく。彼らは、だから指示を受けたかについて問われても、自分の判断で行ったというだけだ。（自分たちの損得を考えての判断だろうけど）週刊誌記者の多面的な取材により、その指示を出した人物と目されていたのが、政権のトップにいた安倍晋三氏だ。私的な友だちや支持者を優遇することに関して得意な安倍氏だったから、その疑惑は納得できる。森友・加計・「桜を見る会」の案件に続いて「またか？」と思ってしまう。

伊藤さんとしては、不起訴によって厚い壁に阻まれた気分させられたことだろう。司法に不信感を持つ

たにちがいない。ジャーナリストとして言論で立ち向かうしかなかった。彼女は2017年10月、著書『ブラックボックス (Black Box)』を書きあげ、世間に公表することに踏み切った。彼女は記者会見に出たり、週刊誌の取材にも応じたりして、公の場に出ている。山口氏もそれに対抗して記者会見を開き、言い分を語った。

そのままでは水掛け論だ。伊藤さんは、損害賠償請求の提訴をすることで、その争いを民事法廷に持ち込んだ。

山口は、この民事訴訟を知るとすぐ不満を露わにし、月刊誌『Hana da』に「独占手記」私を訴えた伊藤詩織さんへ」の一文を寄せた。その言い分をまとめると、「提訴を取り下げろ！ さもないと……」という圧力をかけるとともに、「よくも提訴したな！ テーマを見損なったぞ！」と、伊藤さんを罵倒する、恫喝まがいの内容だった。また、反訴を行い、名誉棄損の損害賠償額として1億3000万円を吹っつけた。

互いに損害賠償を請求しあう奇妙な展開になった。敗訴したら、恥の上塗りになることだろう。

2019年12月、東京地裁（1審）の判決で、伊藤さんが全面勝訴を勝ち取った。それなりに確証があ

ったわけだろう。ただし損害賠償額は1/3に減らされた。山口の請求はすべて棄却された。つまり、民事法廷で、伊藤さんが「レイプされた」ことが認められたわけだ。

すると、刑事事件を握りつぶした役人たちの判断は誤りだったことになる。それなら、刑事法廷でも審判を行うべきだと思えるが、一度「不起訴」になった壁は揺るがないのだ。

この判決に山口は、ますます怒りの炎を燃やす。東京地裁の判決に不服を唱え、すぐに控訴した。高裁を経て最高裁にまで持ち込むのは必至だろう。この事件を注視するマスコミが逐次報道するから（語り継いでいる）、山口氏の汚名がますます色濃くなっているのが実情だろう。民事に関しては、政権からの圧力は期待できないと思えるが……。

2015年4月に起きた事件だが、法廷での決着はどうしても長くなる。法廷の外で、バトルが続いた。外野席のネットでも盛り上がった。だれかに扇動されたかのごとく、伊藤詩織さんの言動をバッシングする（ののしりまくる）声も多数上がったという。山口側と同調した（同情した？）人の声が高まった。彼女は「それにくじけそうになった」と弱音を吐いた。いた

たまれない気分になったことだろう。そもそも被害者の非をあげつらうのは、慎重にすべきだろう。

彼の言い分は、伊藤詩織さんがこのことで本を書いたり、週刊誌に情報を提供したり、記者会見を行ったことで、一方的に名誉を傷つけられたというものだろう。山口氏は、それらに怒り狂っている。つまり、プライベートな二人の秘密を週刊誌にばらしたことが気に入らない。週刊誌に格好のネタを提供したことに、許せない気持ちがあるのだろう。たとえそれが事実であっても、世間にばらされたくはない。でも、その事実が犯罪なら、話は別だろう。

その時、彼女は職を求め、就職の相談のために、実際的な見識のありそうな山口氏に面会を求めた。彼らはその1年半ほど前からの顔見知りだった。山口は、いい女が向こうから近づいてきたとも思ったことだろう。相手は職にありつきたいのだから、少々のことでも言いなりになるとでも思ったのだろう。

（こういう女には酒を飲まずに限る）行きつけの居酒屋に誘い込んだ。彼の思惑通りに事が進行し、結局、その思いを果たしたわけだ。就職相談に来た女性に手を出すことは、地位や立場の乱用であり、セクハラ的だろう。

自分の性被害を告白することには、女性にとつてリスクのあることだ。日本では、まだ世間体が悪い。婚期が遠のくかもしれない。伊藤さんはあえて踏み切ったものだろう。その卑劣さが許せなかったわけだ。

山口氏は「強姦などではなく、合意があった」と言い訳していることが、一番大きな争点だろう。彼は「合意だったから犯罪でも何でもない」と言い張っているわけだ。一般的には、一緒にホテルに入った時点で、「合意」とみなされるだろう。

山口は、その前に酒を提供する店で、彼女にしつこく酒を勧めた。飲ませたという表現が適切だろう。居酒屋を出てからホテルに向かうタクシーの中で、彼女は吐いてしまい、車内を汚したほどだ。そのタクシーの運転手が状況を語る証言が、週刊誌記者の取材によって出てきた。検察などはそこまで調べていなかったのだろう。伊藤さんは、この時点で意識が極度に低下していたと推察され、そこがホテルであることの認識ができなかった可能性が大きい。タクシーを出てから、山口は彼女の体を支えながら、強引に部屋まで連れ込んだわけだ。「彼女は自分の意志でホテルに入った」ことにはならないから、それだけで山口の主張は「アウト」だろう。

当夜のことをもう少し推測と推察を入れると――

山口（当時49）は伊藤さんに「口当たりがよく、アルコール度の高い酒類」をしつこく勧めた。伊藤さんとしても、酔いつぶれるほど飲むつもりはなかったが、むげに断っては相手の気を害してしまう、という配慮から、飲んだ。山口が熱心に話す話題が興味深かった。ずるずると相手のペースに乗せられたのだろう。もう飲めないレベルまで飲んでしまった。意識朦朧とする酔い方になった。彼女は思考停止の状態になった。

ここで一つの疑問として、正体をなくすまで女を酔わせる必要があったのだろうか、ということだ。酒に頼る必要があったのか。

ほろ酔い程度で、互いに気分よく、意気投合してホテルに行くのが筋ではないか。話が盛り上がったところで、「よし、これからホテルに行くぞ！」と宣言しておくのもありだろう。あるいはビジネスライクな付き合い方（取引として納得ずくの行動）もあつたはずだ。

山口には「利発な女だ。もしもホテルの前で拒絶されたら、カッコ悪いだろうな」という懸念があつたのかもしれない。それなら、その前に口説いておかなければならなかった。

山口は一番下手な、失礼なやり方をしたことになる。意識のない相手に性行為に及ぶのは、準強姦そのものになっている。

そして、頃を見計らって、山口はタクシーを手配し、伊藤さんをホテルに運んだ。

それから伊藤さんが意識を取り戻すまで8時間以上かかったという。もうことが終わった後だった。酔いから醒めた伊藤さんは、まんまと男の計略に乗せられたことに、深く後悔し始めた。酔いつぶれていたときの性行為はぜんぜん感じなかったし、記憶にない。何をされたか、わかったものではない。でも、わずかに残る感覚と状況を見れば、だいたいわかる。〈私は、こんな初老の下劣な男（ダズ野郎！）と性交するつもりはまったくなかった。私は酒で自由を奪われ、強姦された！〉と心の中で叫ぶ。

山口の言い分「ナニー？ 合意していなかったけど？ テメーは拒絶する言葉を一言でも言ったかよ？ テメーの体は合意したじゃないか。体を開いて受け入れたじゃないか。態度で合意を示したことになるんだ！」

\*1、心神喪失や抗拒不能の状態に乗じて姦淫する罪。強姦と同じ扱いをうける。（広辞苑）

## ⑧ 菅義偉首相・評判の悪さ

【毎日新聞朝刊 2021/1/27 総合】

1月27日の参院予算委員会で、立憲民主党の蓮舫氏がコロナ対策で首相を追及した。

蓮舫「そんな答弁だから言葉が伝わらないんですよ。そんなメッセージだから国民に危機感が伝わらないんですよ。あなたには首相としての自覚や責任感、それを言葉で伝えようとする、そういう思いはあるんですか！」

菅「少々失礼じゃないでしょうか。昨年9月16日に首相に就任してから、一日も早く安心を取り戻したい、そういう思いで全力で取り組んできました。緊急事態宣言も悩んで悩んで判断した。言葉が通じる、通じないとか私に要因があるかもしれませんが、精いっぱい取り組んでいるところです」

【毎日新聞朝刊 2021/6/14 総合】

サミット初参加の菅首相、（首脳同士の）歓談の輪に入らず、距離を置く姿にネットで賛否。】

【読売新聞朝刊 2021/8/15 言論】

官邸1強は、省庁再編の産物だ。委縮する官僚。政治

家は劣化。中央官庁再編と官邸主導の経緯がある。】

【毎日新聞朝刊 2021/9/4 一面、その他】

菅首相、退陣。自民党総裁選に立候補しないと表明。昨年9月の発足から約1年で退陣。菅氏「コロナ対策と選挙活動は莫大なエネルギーが必要で両立できない。コロナ感染拡大防止に専念したいと判断した」

飲食業者の一人「コロナ対策にさじを投げたのか」  
落合恵美子氏「とにかく言葉にしない。語らない。理  
念がないからだ」】

【毎日新聞夕刊 2021/9/4 近事片々】

結局、裸の王様だった。解散も人事もままならず、孤立した。批判に耳貨さぬ独善。】

【毎日新聞夕刊 2021/9/7 あした元気になあれ】

感染拡大が懸念される五輪の開催について菅首相は質問に真正面から答えず、「国民の命と健康を守っていく」と何度ものらりくらり繰り返した。】

【毎日新聞夕刊 2021/9/8 特集ワイド】

菅首相はコロナ対策で、科学を軽視し、説明を放棄している。】

【毎日新聞夕刊 2021/10/5 近事片々】

質問には丁寧に答えた岸田首相の記者会見。前任者と比べられ、トクすること多いかも。】

菅首相の言葉で、最初に議論を巻き起こしたのは、

一年前の就任時に社会保障のあり方について語ったことだった。彼は三つの要素「自助、共助、公助」を挙げ、「まず自分でやってみることだ」として自助を強調したような言い方をしたのだから、多くの人の不信や反発を招いた。メディアには「自助と言われても……」という具体例が続々取り上げられていた。確かに自助努力は必要だろうし、基点になることだ。しかしその一言で、頼りにならない・冷たい政権のイメージが張り付いた。自助や自己責任は、国民に嫌われる言葉になっている。

本年1月27日に国会で、感染症対策が遅れたことに関して、蓮舫氏が菅首相のいかげんな答弁にいらだった。国民の多くの声を代弁するような「ダメ出し」を連発した。それに対し、鉄仮面の菅氏にしては珍しく、「失礼じゃないですか」と気色ばんで、言い訳らしいことを言い出した。なかなかの迷場面だった。

その言葉を返すと、全力で取り組んできた割には、感染が抑えられていないのが事実だろう。この時点では、欧米に比べて日本ではワクチン接種が大幅に遅れていた。欧米の製薬会社は、自国で生産しようとしな

い日本への供給など、後回しにしていた。

以後も、蓮舫氏は菅氏を攻撃する手を緩めなかった。いつしか菅氏は、蓮舫氏のするどい質問には回答を拒否するようになった。

近年、日本では首相ともなると、国会で野党の議員たちに吠えまくられることになっている。野党の議員からだけでなく、マスメディアあるいは国民の一人一人から、何を言われるかわからないポジションに置かれる。やり玉に挙げられ、何をやっても批判をあびせられる。国民の不满を一身に受ける。雑音が響き渡る中で、ひたすら耐える必要がある。単に聞くだけでなく、時には突っぱね、方針を説明するなど言うべきことを言わなければならない。彼の場合、あらかじめ説明するようなことは一切しない。口が堅すぎる。

声の質・話し方や、顔つき・目つきが気に入らないという人がいるかもしれない。個人特性に関することであり、それを言うのは控えるべきだが、外面的な見栄えも国民的人気を得ることに必要な要素になる。それらを持たないことが、菅氏の評判の悪さの一因になったのかもしれない。

話し方は、たとえ朴訥でもいいのだが、彼の場合、真意を語ろうとしないのだから、話し方以前の問題だ。

それにしても、菅氏はメディア受けのしない人だった。それは官房長官のときからわかっていたことだろう。批判されてもほとんど動じないところが彼の良いところかもしれない。蓮舫氏の場合は別として。

菅首相の会見では、あるいは式典で挨拶するとき、抑揚のない声で、当たり障りのない言葉を羅列する。ほとんど下を向いている。原稿を棒読みしているのだ。ときには、その原稿の中の文言を読み飛ばす……。国会答弁では、官僚が用意した違う原稿を読み始める場面もあった。

インタビューする記者などに質問されても、ありきたりの既存事実だけを話し、今後の方針を示すような、肝心な点には一切答えず、追及されれば、はぐらかすことに徹していた。失言を恐れて、余計なことは言わない主義だったかもしれない。質問の意図など理解していないふりをする。同じ質問を繰り返しても、この人の場合、無駄だった。インタビュー記者のフラストレーションが高まったことだろう。質問と答えが噛み合わないのが常だった。政権に不都合なことはもちろんのこと、検討中の政策など、人に漏らしたくないかのように口をつぐむ。官房長官時代からの彼の習性だ。ほとんど事後報告のみだった。官房長官なら、それで

よかったのかもしれないが、首相になって、そんな対応では通用しない。

この人の答弁のまずさはともかく、独断専行の人だったことに、私は注目したい。他人の声に耳を傾けない人だ、という指摘がある。聞く耳を持たないのだ。

「決めるのはオレなんだ」という意識が強い。説得力がなくても、権力で押し通す。どんな方針であれ、自分が決めることにこだわる。自分の思い付きで決めたタイプなのだ。前もって意向を示すようなことはほとんどしない。いきなり結論を言い出すところがある。周囲の人には、何を考えているのか、さっぱりつかめなかったことだろう。自分の発案が周囲の者に反対され、おじやんになってしまうことを恐れているのだろう。決めたことなら、後から反対があっても、押し通せるのだ。トップのオレが決めたことだとして、他人につべこべ言わせない。

決める根拠がはつきりしない。理念を持っているわけではない。科学的でも、合理的でもないから、その根拠を説明できない。彼は政治的判断とも思っているのだろうか。

そして人事に介入したがるのも特徴的だ。権力をつかみ、自分で配下の人々を動かすことに執念を燃やし

た人だ。人事に関しては、決して譲らない。人事を掌握することが、彼の政治目的であったかのようだ。人事に介入したことが功を奏して、権力をつかんだとも言えそうだ。例えば、開催直前でごたごたした五輪組織委員会の人事では、前会長の森嘉郎氏の面子をつぶし、彼の意向に沿わない形で、橋本聖子氏を据えたのも彼の一存によるものだ。オリンピック・パラリンピックを強行する（開催を再延期すべきという声などを押し切る）ために、風当たりの一番少ない人として。

開催を強行したために、コロナ感染症の大きな拡大、第5波（7〜9月に感染者数が記録的に増えた）が来たようにみえる。（偶然の重なりだろうけれど）

また余談ながら、今回2021年に開催された東京五輪・パラリンピックでは、巨額な予算をつぎ込んだこと（赤字いくら膨らんだかは、恥ずかしくて公表されそうにない）が、国や都の財政をさらに悪化させたことは間違いない。もう後戻りできない国家イベントだったし、財政に関しては、菅氏だけの責任ではない。安倍・麻生・黒田のラインが一番きなくさい。彼らには巨額な借金をしていることの自覚がない。おかげで日本は世界で有数の借金大国に成長した。彼らにとって、どうせ他人の金でしょうよ。

官邸主導の体制を強化したのは、官僚の人事を内閣府が握るようになったことで実現している。従来、官僚の能力が高く、政治にかんりの影響力があつた。なかでも、各省庁の予算配分を決める財務省の力はそうとうなものがあつたとされるが、今は予算枠のタガが外れてしまつて、やりがいがないことだろう。行政だけでなく、法案の作成など立法にも大きな影響力があつたとされる。ほとんどの法案は各省庁の官僚によつて練り上げられるものだろう。菅氏が官房長官の時代から官邸主導の体制を強化してきたために、気骨のある有能な官僚の出番が少なくなつた。官邸に逆らえば（異なる意見を言えば）、左遷される体制になつていく。

今年の1月に問題になつた学会議の会員の選任に関して、6人を任命しなかつた理由を、ついにあいまいにしたのも彼らしい。それでは、まともな理由なくして任命しなかつたことになる。

〈官房副長官に指示して、政府の方針に批判的なやつらをリストから除外させた。オレは判を押しただけで、リストの内容まで見てないよ〉などは、とても公言するわけにはいかない。それがバレバレの状況になつたけれど、菅氏は、いくら批判されても、再任を要求

されても、信念を曲げなかつた。

9月3日、彼は退陣（予定された自民党総裁選への不出馬）の意向を表明した。感染症の緊急事態宣言の発出中であり、パラリンピックがまだ開催中の時でもあつたし、その直前まで総裁選へ出馬する意欲を示していたものだから、多くの人が驚いたことだろう。内閣支持率がじりじりと下がつて25%前後になつていた時期だが、いきなりの表明だつた。彼の退陣表明に伴い、任期一年間の労をねぎらう世論の声は少なかつた。あちこちからこき下ろす声が噴出した。ほとんど、けちよんけちよんだつた。これほど批判が付いて回る人は珍しい。言論の自由とはいえ、個人攻撃に近い。私が少しかばおうとすると、彼なりに一生懸命やろうとした姿勢だけは認めたい。コロナ対策で、樂觀的な説明に終始したことも、良い点だつたかもしれない。国民の不安をおおるようなことをいうのは避けたのだろうけれど、ある科学記者は、それを根拠のない樂觀と批判した。人々の気を引き締め、防止効果を高めるためには、小池百合子都知事のように、むしろ切迫感をあおる警句を常に発することの方がよいのだろう。

立候補をしない理由について「コロナ対策に専心し

たい。総裁選には莫大なエネルギーを使うから、両立はできない」ことを挙げたが、やはり最後まで真意を語らなかつた。コロナ対策など、それは体のいい言い訳に聞こえる。言い換えれば「自分にその能力がない」と言っているだけだ。〈オレは総裁選に立候補したかったんだが、もう当選する見込みがなくなつたからね〉という理由を述べれば、一番わかりやすかつた。党内で「こんな不人気の首相（自民党総裁）の下では、10月下旬に予定される衆院選に勝てそうもない。議席を減らしてしまふ」という思惑が広がつたことに、彼はようやく気付いた。

ときどき余計なことを口走つて、世のひんしゆくを買つていた二階俊博・自民党幹事長。二階氏も、失礼ながら、見栄えがしない。その任期が長すぎるという批判が、党内でもようやく出始めた。〈二階・菅のコンビは最悪だ〉という声が出ていた。総裁選の立候補予定者・岸田文雄氏が「私が総裁になれば、彼を退任させる」と言い出したものだから、あわてた彼は、批判の矛先をかわすかのように、二階幹事長の退任を予告したのだ（突然の人事だったという印象を私はもつた。二階氏は、菅氏が首相になれた恩人の一人だつたはず）。しかし、菅降ろしの声は治まらなかつた。彼

にとつて良好な関係にあつた二階派を敵に回したことになり、その議員グループ（派閥）の支持を失つた。さらに最大派閥などの主要なグループが、菅氏から次々に離れたのだろう。菅降ろしは、自民党の重鎮たちの意向によるものだろう。彼は自分から降りるしなくなつた。一年前は、安倍氏の後継として期待されていた彼だったが、期待外れだつたことになる。（新首相になる人は、だれでも初めは期待される）

### ⑨ コロナウイルス空気感染とワクチン副作用

【毎日新聞夕刊 2021/4/8 社会】

アストラゼネカワクチン血栓問題、「血栓者はワクチンの極めてまれな「副反応だ」と認定する」  
他のワクチンは血栓症が報告されていない。英国で実施した2000万回超の接種で79件の血栓の症状が見られた。】

【毎日新聞夕刊 2021/9/15 総合】

国がかたくなに空気感染を認めてこなかつた。「政府が感染経路をごまかしてきたことが感染を拡大させた元凶だ」と専門家38人が緊急声明。WHOは今春「空

気感染」(エアロゾル)を感染経路だと明記した。】

## ・副反応

従来、薬品分野の用語「副作用」は一般的な言葉として使われていたが、薬ではなくワクチンの場合、それに相当する言葉として「副反応」が使われていることに、私はとまどいを感じる。「副反応」というからには、「主反応」があるはずだ。ワクチンの場合のばあい、ウイルスに対する予防効果を「主反応」ということになるわけだが、反応という言葉ではすっきりしない。ワクチンによって免疫機能を強化することを「反応」といつてよいのだろうか。

2020年にはメディアの間でも「副作用」が使われていたが、だいたい2021年になってから「副反応」と言い出し始めた。ワクチンの実用化に伴って、副反応に置き換えられたわけだ。

ワクチンの効能以外の症状や発熱などが現れた場合、すべて副反応と呼ぶようになった。ワクチン接種に伴って数日間に現れる周辺部の痛みやだるさなども副反応だ。マスメディアもそれらを副作用と呼ぶ。ワクチンの辞書に「副作用」という言葉はないかのように、徹底している。

一般的な言葉を使わない理由としては、「副作用」には悪いイメージが付きまどっているから、政府が、ワクチン接種を推進するために、その言葉を避けたということだろう。国民の中で、副作用という言葉聞いた人が拒絶、アレルギーを起こしてしまわないように、配慮したわけだろう。

コロナワクチンに対しては、新開発されたもので、実績が乏しい。ワクチンとしての効き目に疑いがある(ワクチンを2度接種しても、感染を防ぐ十分な効果がないことがわかってきた)だけでなく、その副作用で「変な症状」が出るものがあっては、二の足を踏む。

「副作用」がでる確率が、いくら低いといっても、絶対的に安全とは言い切れない。

ワクチンの開発では、副作用が少ないことが前提条件になる。症状や病原に対していくらか有効性を示しても、重大な副作用があつては、使えない。安全性が確保されていないなければならない。今回開発されたワクチンのいずれも、治験などのテスト過程において多少の副作用が報告されていた。接種直後に起こる倦怠感、アナフィラキシーや心筋症などだ。

開発を急ぐ必要もあつて、それらは「無視できるレベル」にあるとして、世界保健機関や多くの政府は認

可したわけだ。ワクチンの有効性については、100パーセントではないにしろ、一定の評価を得た製品ができています。

「無視できるレベル」といっても、健康を損ねるようなことが自分自身に降りかかってはかなわない。接種を躊躇する人が出てくるだろう。副作用があるといつては、安全性に疑問を持たれてしまいかねない。

そこで、政府は「このワクチンでは、副作用はあり、ませんよ、副反応がまれにあるだけですから、接種しましょうね」とささやく。さらに「接種した腕が痛くなるのは、厳密にいえば、軽い副反応ですけれど、ワクチンの効き目の表れですよ。2〜3日我慢してください」と付け加えたりする。

「副作用」を「副反応」に置き換えたのは、政府が接種を進めるために言葉を選んだ、というべきものだろう。わざと専門的な言葉を使って、国民をだます意味（けむに巻く策略）がある。外国では（特に英語圏）、そんな用語を使い分けていないという。

ある接種会場で、憶測される発言「ナニー？ アナフィラキシーの症状で、待機観察中の接種者が倒れたら？ それは副反応の一つであることがわかってるんだから、驚いちゃいかんよ。まれなケースで、あ

りうることだ。ナニー？ また別の接種者の具合が悪くなつただと？ まれなケースがたまたま同時に起きてもおかしくはないんだよ！ エエー？ またかあ、**気分が悪くなつただと？**（オレの気分が悪くなるよ）」

#### ・ 空気感染

新型コロナウイルスによる感染症（COBITE-19）について、国がわかりやすい説明をしてこなかった一例は、コロナウイルスが空気感染するという事実を隠していたことだろう。2020年1月からの一連のコロナ騒ぎのあいだで、前掲の記事が報道されるまで「空気感染」という言葉は聞こえてこなかった。つまり、主流の専門家たちは「コロナウイルスの感染経路は、空気によるものではない」と言っているようなものだ。

〈故意にこの言葉を使わない〉という指摘がある。一部の専門家グループからのものだ。「空気感染」するから、マスクを必要とするのだ、といえ、だれもが納得してマスクを着けたらう。ソーシャル・ディスタンスが必要なことがすぐに理解できる。複数の人が共用する部屋では、誰もが換気に注意するようになっていだろう。「空気感染」するしても、その濃度が薄ければ（一定量の空気の中で漂うウイルスの数が少

なければ）、感染は確率的に下がるのだろう。

コロナウイルスは、微小な「病原体」（生命体とは言えないらしい）であり、高性能な電子顕微鏡でも使わないと、目に見えないのはもちろんだ。春によく飛んでくる花粉よりずっと小さいから、感染者の主に鼻や口から飛び出たウイルスは、ゆうゆうと空气中に漂う。ウイルスは、体の免疫システムをくぐり抜け、細胞にとりつくと、その中で増殖し（自分のコピーを大量に作らせる）、とび出す……。そう考えると、確かに恐ろしいが、一つ一つは、もともとと生命力といふべきものをもたず、か弱いものだから、しばらく飛んでいるうちに感染力を失う（不活性化する）。ウイルスは、鮮度が命なのかもしれない。

一般的認識では、コロナウイルスに感染すると、高熱が出て、味覚がなくなる。息苦しくなり、血中の酸素飽和度が下がり始める。さらに重症化すると、何人かは、ある確率で死んでしまう。いったん回復しても、だるさが続くなど後遺症が残る例が報告されている。症状の軽重は、統計的な分布があるとはいえ、これは恐ろしい。

2021年の5〜6月からワクチンが出回り始めると、だれもがコロナで死にたくないから、われ先に予

約しようとして、躍起になったものだ。比較的のんびりしていた私も、いざ予約しようとしたとき、なかなか予約できないことに焦った。早々にすんなり予約できた人は、幸運だったと言えるだろう。結局、私はツテに頼った、

おそらく政府関係者は、「空気感染する」と言ってしまうと、国民がさらにパニックを起こすとも考えただろう。空气中にコロナウイルスが飛び散っていると考えると、人々の中には空気を吸うことを恐ろしがって、呼吸しなくなったりして、あるいは、空気清浄機が飛ぶように売れたりする（私が見たところ、公共的な施設にはしっかりと設置されている。売れきれの前に政府が確保した？）。恐怖が怒りとなって、国民の不安や不満が政府に向けられ、政府の関係者は、無策が追及されてしまつては（まずい）と考えたのだろう。

国民の不安を高めないように、政府は「空気感染」という言葉を使わないことを、関係部署に周知させたのだろう。つまり、空気感染にビビった政府がかん口令を敷いたというわけだろう。

⑩ タリバン、強すぎ

【毎日新聞夕刊 2020/2/22 総合】  
アフガン7日間の停戦開始。

タリバンと米国の事実上の停戦が良好に実施されれば、2001年から続く「米史上最長の戦争」の終結に向けて前進する。】

【読売新聞朝刊 2020/7/25 国際

アフガン、両親を殺害したタリバン7人に少女が反撃、3人を射殺。3人のうち1人は少女の夫だった。】

【毎日新聞朝刊 2021/7/7 国際

アフガン兵1000人超が隣国タジキスタンへ、タリバンの攻撃を恐れて逃げる。】

【読売新聞朝刊 2021/8/1 一面、社会

米、アフガン撤収完了。最長の戦争が終結。01年10月に侵攻を開始、タリバン政権を追い落とし、タリバンの反撃により米兵ら2461人が死亡し、戦費や関連予算2兆ドル以上をつぎ込んだが、同時テロから20年の節目を前に、タリバンの復権を許すことになった。】

【毎日新聞朝刊 2021/8/13 国際

タリバン、アフガンの10州と制圧。米誌「3カ月以

内に首都陥落もある】

【毎日新聞夕刊 2021/8/16 一面

8月15日、タリバン首都制圧、アフガン政府崩壊。タリバンは首都カブールを包囲したうえで大統領ガニ氏に対して「平和的な権力の移譲」を要求。】

【毎日新聞朝刊 2021/8/17 国際

ガニ大統領、大金持ち出し逃亡か。4台の車に現金を積み込んで空港でヘリに積み替えた。一部は滑走路に残ったままだった。】

【読売新聞朝刊 2021/8/23 国際

米がアフガニスタン政府軍に提供した武器がタリバンの手中に。

軍用ヘリコプター、プロペラ攻撃機「スパーツカノ」、ドローン、ライフル銃や弾薬、軍用車両7万6000台、暗視ゴーグル1万6000個など】

【読売新聞朝刊 2021/8/23 総合

タリバン、実質的な融和策。タリバン報道官は一部の戦闘員による蛮行を認めたが、「われわれも人間だ。過ちは仕方がない」と開き直った。「食事がまずい」として調理の女性を殺害。】

【毎日新聞夕刊 2021/9/8 一面

アフガン政権崩壊、育たなかった国民意識。群雄割拠

し、地ならし困難。政府軍の士気低く。】

【毎日新聞朝刊 2021/8/20 国際

アフガン、女性問題省が勧善懲悪省と看板変更。女性活動家「女性とともに働きたくないとのタリバンの明確なメッセージだ」】

【読売新聞朝刊 2021/9/1 一面、総合

米、アフガン撤収完了。最長の戦争が終結。01年10月に侵攻を開始、タリバン政権を追い落とししたが、タリバンの反撃により米兵ら2461人が死亡し、戦費や関連予算2兆ドル以上をつぎ込んだが、同時テロから20年の節目を前に、タリバンの復権を許すことになった。】

【毎日新聞朝刊 2021/9/7 総合、国際

アフガン、タリバンがパンジシル州を制圧。これで全34州を制圧。抵抗勢力との交渉を不調として、武力行使を正当化する。】

【毎日新聞夕刊 2021/9/8 一面

タリバン暫定政権が勧善懲悪省を復活させる。恐怖政治の象徴。また、テロリストとして指名手配されているハッカーニ氏が内相に就任することに、英紙が衝撃的と報道した。】

【毎日新聞夕刊 2021/9/14 総合

UNHCR職員・森山毅さん、8月15日カブールを制圧してからタリバンの動きは予想より早かった。9月7日に発表した暫定政権の主要閣僚の大半は多数派のパシウトウン人で占められた。「女性は家庭に残るべし」との指示が出された。人口約3900万人、日本約1.7倍の国土面積を持っている。】

今年になって米政府（バイデン政権）がアフガニスタン（アフガン）からアメリカ軍の撤収を決めたことが報道されてから、タリバンの攻勢は早かった。8月15日にカブールが制圧された。革命的な政権の交代だった。それは、だれも予想しない速さだった。アフガンでは武装勢力が群雄割拠していたというが、タリバンの一人勝ちになった。戦闘集団・タリバンの強さが光る。タリバン以外のいくつかの有力と思われる武装勢力は、ほとんど平定された。最も強い勢力に呼応して、一つにまとまる形になった。そして、タリバンが天下人になった。

タリバンを強力にバックアップする外国兵力があったからか？ という疑問がまず浮かぶが、その影は見えない。親しい関係のあったパキスタン軍の支援が考えられるが、伝えられていない。あったとしても、武

器類を商取引する程度だろう。

タリバンの自力によるところが大きい。タリバンの強さについて、私なりに分析したい。

・武装勢力の地域密着性・排他性

アフガンの人たちは、外国勢力に対して、きわめて排他的な行動をとる。外国勢力の追い出すために、一致団結するところがある。今回はタリバンの呼びかけに呼応したのかもしれない。これまで歴史的に、イギリス、ソビエト、そして今回アメリカを武力で追い出した。これほど攘夷に成功している国は珍しい。そして、アメリカが20年かけて育てようとした民主的な政権が、武装勢力によって簡単にのつとられる姿を、われわれは目撃することになった。私の頭には「タリバン維新」という言葉が浮かぶ。イスラムの「御旗」を立てたタリバンが「賊軍」の政府軍を圧倒した。

首都カブールの制圧後、間もなく、タリバンは暫定政権を立ち上げ、国の支配体制を再び確立した。20年前まで政権を担っていただけあって、手際良く構築している。20年前、アメリカが強力な兵力でアフガンに侵攻し、強引に民主的国家を作り上げようとしたが、その兵を引き上げると、すぐに政権がひっくり返された。地域に根付かない体制では、長くは持たない

ことが証明されてしまった。

・タリバンの恐怖政治

タリバンは、人々を怖がらせ、力づくで人々を統制・支配するやり方をする。恐喝的で、強権的だ。

タリバンは、脅し方がうまい。かつてバミヤンの石仏を破壊したのも、粗暴な力を見せつけるためのデモンストレーションの意味があったと私はみる。飯がまずいと言つて、銃で女を撃ち殺したという最近のニュースはわざとタリバンの報道官が広めた感がある。

人々に恐れられることは、支配する側の人にとっては、理想的な体制なのかもしれない。タリバンに抵抗した人や、宗派を異にする人、米軍に協力的だった人は、国外に逃げ出すしかないようだ。

タリバンは高い戦闘力と、戦術的な強さも持つ。交渉力も高そうだ。他の部族が敵対するようであれば、使節を送り込んで、「キサマらあ、われわれに従うのか、それとも反抗するのか？」と脅す。小さい部族は、戦闘になったら、とても勝ち目がないから、たいてい平伏する。すると上納金が要求されるのだろう。

「恭順するしるしに、みかじめ料を出せや！」と恫喝されたりして。

ただし、タリバンとIS（イスラム国）系の武装勢力とは、ともにスンニ派に分類され、同じような武装勢力にみえるが、敵対関係（ライバル？）にあるときとされている。ISがタリバンの敵か味方か、はつきりしない。

#### ・タリバンの宗教的バックボーン

タリバンは、イスラム原理主義勢力とされる。詳しく言うと、イスラム教スンニ派（スンナ派ともいう）の諸派の一つ、デオバンド派だ。宗教の教義を掲げての戦闘集団だ。彼らは武器を持ち、神のために戦う。もともと、彼らはイスラム教を学ぶための学生たちだったという。タリバンは学生を意味する。「神は偉大なり！」をモットーにし、聖戦（ジハード）を展開する。彼らは「アフガニスタンは神の国である」と思っているのだろう。異教徒に対して、敵対的態度をとることが彼らの正義だろう。イスラムの教えに忠実であるうとする。イスラム教では、自爆攻撃も肯定されるようだ。

彼らは一般の人々にも銃を向ける。各地で、集団で人々に銃を突き付け、金品や現品を巻き上げてきた。力を蓄えていた。人々は恐怖におののき、彼らに従わざるを得ない。むしろ、人々に嫌われている組織だろ

う。人々に嫌われようが、武力を持つものは強い。まして権力があれば、なおさらだ。

彼らの信念では、アフガニスタンでの法や秩序はイスラム教義に基づかなければならない。イスラム法をタリバン独自に解釈するところがあり、人口で多数派のパシュトゥン人の古来の掟おきてを反映しているともされる。それを具体的に実践するのが政治であり、政府だ。彼らは政教一致をモットーとして政権奪取を目指してきた。

タリバンが天下を取ったことで、一番困るのは、アフガンの女性たちだろう。タリバンは女にも強い。タリバンは、イスラムの教義を勝手に拡大解釈して、徹底した男女格差を秩序とする。アフガンの女性たちは、今後、教育を受けられず、職にも就けず、外出時には全身を覆うブルカを着用しなければならぬ。

なお、男はひげを刺ってはいけないという戒律が定められる。勸善懲悪省が目を光らせ、規制に違反する人々をしつかり取り締まる。人々に恐れられた体制を復活させ、身分制度を固めるのだろう。もちろん、タリバンの幹部たちが最上位の階層に上る。

#### ・タリバンの武力

彼らは、兵士というより昔の日本の「武士」のイメ

ージに近いだろう。地域に根付いた武士たちが、国全体を統治する組織に成り上がる。その幹部たちはイスラム原理主義を標榜しているが、イスラムの衣の下に、常に武器を隠し持つ「武将」たちだろう。

タリバンが多大な戦利品をせしめた。戦利品とは、アメリカ軍が残した軍用機・武器・弾薬・装備類だ。

いずれも最新式のものだろう。アフガン政府軍に与えていたものが、すべてそのままタリバンに渡った。

タリバンは、これですますます力を得たことだろう。

当面足りないのは、財力だといわれている。政府の財政を引き継ぐにしても、どうせ政府は赤字体質だから、借金を背負うのかもしれない。国民からどれだけしぼり取れるかにかかっている。国内の経済は疲弊しているから多くは期待できない。

国際的な援助を必要とする。援助がなければ、多くの人々が生活できなくなる恐れがある。タリバン政府が国際的に認められるかは、今後の課題だろう。国際的に制裁が加えられたならば、高利貸の中国が手を差し伸べてくれる可能性が大きい。

・政府軍が弱すぎた

今回の武力闘争で、特筆すべきは、アフガン政府軍が弱かったことだ。米軍が駐留し補佐していなければ、

持たない軍隊だった。士気がまったく上がらない政府軍の兵士たちの姿がある。兵員の数ではだんぜん上回り、その数倍の戦力を備えていたはずなのに、その弱腰ぶりは目に余る。どんな最新鋭の高価な武器を持たせても、「タリバンが攻めてきた！」という通報が入れば、一斉に武器を投げ出して、逃げまくる——そんな光景が随所に見られたらしい。7月には、1000人の政府軍部隊が国境を越えてタジキスタンに逃げ出したことが報道された。

彼らには国を守るという意識が低かった。タリバンなどとの内戦に駆り出され、自分の馴染みのない地域に派遣されたりするから、故郷を守るという意識がわかない。アメリカ軍の支援があるにしても、20年前にアフガニスタンを戦乱の渦に巻き込んだのはアメリカ軍であり、侵攻してきた外国軍隊だ。早く出て行ってもらいたいというのが、一般的な市民感情だろう。政府軍の将兵にとって、タリバンなどより、アメリカ軍の方が敵であり、協力したくない相手だろう。

政府軍の兵士たちにとってタリバンとの戦闘は厄介だった。タリバンのほとんど見えない影におびえる。服装からして、彼らは一般の人と同じような服を着ているだから、区別が付かない。タリバンは物陰にひそ

み、銃で狙撃してくる。道路に爆弾を仕掛け、車両を爆破したりする。歴戦のつわものがそろうタリバンの正確な射撃や砲撃に、政府軍はビビりまくる。どこから飛んできたかわからない弾丸によつて射殺される。実際に彼らの死亡率は高かったとされている。そして、脱走する兵士が多かったという。脱走した兵士がタリバン側に寝返ったことも容易に考えられる。

基本的に同じ民族同士だから、部族は違つていても、殺し合いはしたくないという意識が根底にあるのだろう。ほとんどが一般の市民だった者たちで、少しばかりの給料ほしさに、いやいやながら兵役に就いたものばかりだったようだ。

米軍から派遣された軍事顧問たちが、彼らを教練したはずだが、いくら叱咤激励しても、うるさがられただけで、やる気にさせることはできなかった。アメリカ軍のブート・キャンプのように新兵の尻を叩くわけにいかなかった。

#### ・政府のだらしなさ

国を守るべき最高責任者の大統領ガニ氏は、タリバンにカブールが包囲され、政権移譲を要求されると、政府軍に対し、首都を「無血開城」する指示を出したという。防戦するのは、無駄な抵抗だと悟つたのだろ

う。そして、自身はあわてて4台のトラックに現金の山を運ばせ、すたこらとカブール市内の国際空港からヘリコプターで国外逃亡したのだから、情けない。アフガニスタンの大統領は何だったのか、という疑問がわいてくる。アメリカ軍に頼りすぎて、自分の蓄財以外関心がなく、何もしなかったようにみえる。役人たちの汚職が多かったと伝えられるから、大統領が率先して汚職していた疑惑が浮かび上がる。そして、日本の援助は何だったのか？（たとえ、それが微々たるものだとしても、空しさが感じられるところだ）  
貧困のせいで、この国に暴力や汚職が蔓延まんえんしたのだろうという「言い訳」が私の頭をよぎる。

#### ⑪ アフガン・首都カブールで誤爆

【毎日新聞朝刊 2021/8/27 一面】

アフガニスタン、カブールの空港付近で爆発2回、IS系が犯行声明。ISの支部組織「イスラム国ホラサン州」

【読売新聞朝刊 2021/8/28 一面、国際、総合】

アフガン・カブール空港近くで自爆テロと銃撃があり、

アフガン人ら少なくとも95人が死亡。米兵13人が死亡した。タリバンとイスラム国は異なる思想を持ち、激しく対立。】

【毎日新聞朝刊 2021/9/12 国際

8月29日、カブールで米軍無人機が民間人を誤爆した。アフマデイさんは水の供給が停止したため、職場でポリタンクに水を入れ車に積んでいた。無人機で監視していた米軍がこの容器を爆発物と見誤った可能性があるという。米軍「車内に爆発物があったと判断できる」】

【毎日新聞夕刊 2021/9/15 総合

米軍が8月29日にアフガニスタンの首都カブールで行った無人航空機による攻撃について「政権で調査している」

この攻撃で子ども7人を含む一家10人が死亡した。米軍は「カブール国際空港に差し迫る脅威があった」として住宅街の車を攻撃。IS-Kのメンバーのうち少なくとも1人を殺害したとしている。しかし、標的となったのは米国の慈善団体に勤務していたゼマリ・アフマデイさん（48）の可能性が高い。】

【毎日新聞朝刊 2021/9/19 総合

米軍がアフガン誤爆を認める。

8月26日にIS-Kによる自爆テロが起き、米兵ら約170人が死亡したのを受けて、米軍はさらにテロが続く可能性があるとみて警戒を強めていた。29日にテロリストが乗ったと信じた白い乗用車を空爆した。無人機での攻撃で、子供ら10人が死亡した。米軍はISホラサン州（IS-K）の戦闘員を狙った攻撃だと説明していた。】

【毎日新聞朝刊 2021/9/19 国際

アフガン誤爆10人死亡の件、米が「白いカローラ」を誤認した。

米軍は「次のテロはトヨタの白のカローラが使われる」との情報入手していた。米軍が「ISのアジト」と警戒していたカブール市内の施設近くに立ち寄ったのが、白のカローラに乗ったアフマデイさんだった。米軍はこの車を無人機で約8時間にわたって追跡し「爆発物を積んだ」と判断して攻撃した。

しかし調査結果、米軍が爆発物と認識したのは家庭に運ぼうとした水の容器だった。「標的が相当量の爆発物を積んでいたため、二次的な爆発が起きた」と説明していたが、一般的なプロパンガスか、ガソリンタンクによる火災の可能性が高いことが分かった。アフマデイさんが車で帰宅した時に攻撃があり、駆け寄った

子供たちも巻き添えになった。」

【毎日新聞朝刊 2021/10/1 国際

アフガンでの遠隔攻撃、誤爆で犠牲者が出たことで、議会で追及される。米軍は正當化に躍起となる。米軍は今後の対テロ作戦で、遠隔地から無人航空機などで攻撃する能力「オーバー・ザ・ホライズン（OTH）」を重視しているが、誤爆を機にその能力を疑問視する声が上がっている。】

【毎日新聞夕刊 2021/10/4 総合

10月3日、アフガン首都カブールのモスクで爆発8人死亡、モスクの外にいた市民たちが犠牲、タリバンのメンバーらの死傷者はいなかった。タリバンがカブールを制圧した8月15日以降もIS-Kがテロ活動を続けている。8月26日にはカブールの国際空港のゲートで170人以上が死亡する自爆テロがあった。カブールでの大規模な爆発は8月30日に米軍が完全撤収して以来初めて。】

タリバンが8月15日に首都カブールを制圧した後、8月26日にアフガン・カブール国際空港入口近くで、大きな自爆テロがあった。これを第一の爆発としよう。甚大な被害をもたらした。空港は大混乱になった。後

日の集計で、死者は約180人に上った。タリバン政権を恐れて、国外に脱出しようとしていた人が多数集まっていた中での暴虐だった。これにより、足止めを食らった人々が大勢いたことだろう。

ISグループの一つ、IS-Kが、ずうずうしくも、自ら犯行声明を出した。タリバンばかりが注目されていたことに不満を持ったISグループが、自分たちの存在感を高めるためにしたことだろうか。確かに悪名が轟いた。

さらに第二の爆発があるだろうとする米軍の予測があり、緊張感が高まっていた。疑心暗鬼になっていた時だ。バイデン大統領も第二の攻撃があるとして声明を出し、警戒を呼び掛けていた。米軍の撤収が進んでいたから、警備上の弱さが心配された。月末の完了予定日が近づいていた。軍隊が撤収するときに、一番狙われやすい。（実際の第二の爆発があったのは10月になってから\*1）

死者の中に米兵13人が含まれていたことが、米軍の感情を動揺させたことだろう。かなりのショックを受けたとみえる。「われわれはもう撤収するのに、なんてこった!」「こんなことをしたヤツらに、相応な代償を払わせてやる!」

テロリストたちに対して、憎しみとリベンジの心が燃えたことだろう。そんな感情が、冷静さを失う原因になったと考えられる。

そして、やっきとなつて搜索をした米軍は、その三日後の8月29日、爆発物を積んだと思われる車を発見し、空からの無人機によるミサイル攻撃で破壊した。この成果を誇らしげに発表した。「少なくとも一人のテロリストを殺し、未然にテロを防いだ」

しかし、調べてみると、殺したのはテロリストではなく、子どもを含む一般市民10人であり、車には爆発物など積んでいなかったことが、まもなく判明した。数日後、米軍は誤爆を認めざるを得なくなつた。言い訳がましいことを言いながらも、「被害は補償する」と付け加え、いささかの誠意を見せた。

そのテロリストとみなされたのが、ゼマリ・アフマディさんだつた。「ポリタンクで水を運んでいただけなのに」と、天国でぼやいているのかもしれない。

思い込みやすい心理状況にあつた米軍の、具体的な失策要因を挙げてみよう。

・ 白いカローラの都市伝説を信じた  
米軍は「次のテロはトヨタの白のカローラが使われる」という情報の信ぴょう性を誤つた。その出どころはと

もかく、それは確かな情報ではなかつたことになる。デマだつたのかもしれない。実際には白のカローラによる自爆攻撃など、起きていない。首都カブールで白いカローラが何台あるのか、正確には知らないが、それは一般的な車種だから、少なくとも1000台以上走っているものだろう。それを、空から見ただけで特定するのは不可能に近い。米軍には、白のカローラがすべて、テロリストの車に見えていたのだろう。

・ 爆発物らしい荷物を積んだ白いカローラ発見  
アフマディさんはポリタンクで職場から水を運ぼうとしていた。米軍はそれを見ていたのだろうか。米軍はポリタンクの中に入っていたものが爆発物だと、何をもって判定したのだろうか。

どこでそれを積んだかについてもわからず、カブール市内の道路を走る白いカローラが怪しい荷物を運んでいたことを、高空から発見して、追跡が始まつたわけだろう。8時間追跡していた。もしも、第二の爆発を防ぐためだけなら、先回りして道路上に検問を設置し、車を止めて、車に積んだ荷物を調べればよいことだろう。それは現地の警察の仕事だが、タリバンの暫定政権に連絡を取れば、タリバン側も協力したはずだ。しかし、米軍は高みの見物で追跡していた。爆破阻止を

自分たちの手柄にしたかったようだ。

・ 白いカローラを運転していた人物

車の所有者を割り出すことは難しくない。無人機は車のナンバープレートの数字を読みとれるほどの「視力」を持っているはずだから、そのナンバーを陸運局など管理部署に照会すれば、すぐに所有者を特定できる。

その所有者の電話番号もわかるだろう。個人所有の車であれば、人物を特定することができる。しかし、それもせず、「米国の慈善団体に勤務していたゼマリ・アフマディさん」であることを割り出しもしなかった。彼は米国側の協力者だったわけだ。米軍は味方の人物にミサイルを放つことになる。人物を割り出していたら、電話して、「今、車に乗っているか、どうか」ぐらいのことを確かめてもよかった。該当する車が、もしも盗難車とわかれば、ミサイルを放つ決断をしてもよかった。無人機は、アフマディさんの車を8時間も追跡していたというから、その間、余裕で調べられたはずだ。

・ 白いカローラがテロリストのアジトと思しき施設の近くに立ち寄った

米軍はそれを一つの根拠にした。アジトの施設に出入りしたのではなく、近くに立ち寄っただけだ。アフマ

ディさんはそこで何をしていたのだろうか。単に「近くに立ち寄った」というだけでは、無関係だった可能性の方が大きい。そもそも、そこがほんとうに「テロリストのアジト」だったのか。怪しい施設なら、それまでに兵士らを派遣し、踏み込んで家宅捜査なりをしなければならなかった。確証がつかぬまま、米軍は「そこがテロリストのアジトらしい」と思い込んでいただけではないか。

・ 白いカローラが最終的に住宅地に停まった

そこに車が止まると、出迎えの子供たちが駆け寄ってきたことが、無人機からは見えていたはずだ。テロリストの車に子供たちが駆け寄ってくるのは「おかしい」と疑問を持つべきところだろう。そこでミサイルを发射すれば、子供たちを巻き込んで、殺してしまうことになるのを考えなかったのか。遠隔でこの映像を見ていた兵士は「テロリストの家族など、いっしょにやっちゃえ!」と思ったりして、「車が止まっていれば、狙いはずすことはない。少なくとも一人のテロリストを殺せば、大きな戦果になる。われわれの手柄だ!」そんな住宅地に車が停まること自体、一般市民の車という可能性が高い。住宅地でテロ活動するわけはないだろう。「これは一般市民の車ではないか?」とい

う疑念がわきそうなものだ。その住宅地の位置を特定するのも容易だろう。その住所が「米国の慈善団体に勤務しているゼマリ・アフマディさん」の家であることが、すぐにわかりそうなものだ。この地域が断水しており、水を車で運ぶ市民たちが複数いることを把握していなかったのだろうか。水を運んでいるという可能性を、米軍兵士たちは考えなかったことになる。

ミサイルは、車だけでなく、その住宅も破壊し、ガス漏れによるらしい火災が発生した。たまたまアフマディさんの家に来ていた親戚家族も巻き添えにした。22人が集まっていた中で、10人死亡した。負傷者も多数出たはずだが、報道されていない。米軍は、その火災を「車に乗せていた爆発物が二次的に火災を起こしたものだ」という身勝手な解釈をしていた。住宅地にミサイルを放てば、いくら正確に命中させたとしても、周辺に被害が及ぶに決まっている。

つまり、この無人航空機のシステムは、ミサイルや精密な誘導爆弾を搭載し（今回、どちらを使ったのか不明）、かなり正確に目標を破壊できるものだ。過去にはイラクで、走っている車にも命中させた実績がある。それを遠隔で制御する人が、目標を誤った。裏付けのない、いい加減な情報を根拠にして「撃て！」と

命令した指揮官の責任が一番重いだろう。高空から偵察し、疑わしいだけで、ミサイルを放ったのだから、重大な「犯罪行為」だろう。

\*1、第二の大きな爆発事件は、それから約一カ月過ぎて、10月3日にあった。モスクの近辺で爆発があり、8人が死亡した。そこでは一人のタリバンの母親の葬儀が行われていたという。またIS-Kの犯行だろうが、シーア派のモスクで、しかも葬儀の場に爆発物を仕掛けるなんて、罰当たりなことだ。いやがらせ的な破壊行為をしている。

宗派の対立があるのだろうが、タリバンは基本的にスンニ派の一派だから、同類のスンニ派IS-Kによるシーア派へのテロを黙認しているところがある。テロの取り締まりは形だけかもしれない。そして第三の大きな爆発が……。